

監訳者

小澤 勉 (おざわ・つとむ)

翻訳家



著者のマイケル・ジーン・エドワーズは、『**Kilimanjaro: One Man's Quest to Go Over the Hill**』の中で、ヘミングウェイの『キリマンジャロの雪』の主人公であり、自らの失敗した人生を回想しながら死んでいく男ハリー・ストリートを何回も引き合いに出しています。自分なりの人生の評価は、俗に言う「棺桶に片脚を突っ込んだ時」になってはじめてわかるといいます。肥満と高血圧で「中年の危機」に見舞われたマイケルは、ハリーのように、死ぬ時になってから自分の生き方を後悔したくないと思ったのでしょうか。また、何もできずに‘座して死ぬ’のも嫌だったのでしょう。奥さんに成人病を治してから、と釘を刺されながらも、アフリカの最高峰キリマンジャロの登頂を決意します。そしてそれをテコに、外交官の職を捨て、本当にやりたかった作家の仕事への転身を果たします。そんなわけで、著者のマイケル自身が選んだトライアルの課題は、この冒険物語の最大の山場ともいえる、彼がキリマンジャロ登頂の決意を固めるまでの経緯を語る部分です。

この本のもう一つの大きな山場、それはもちろん、文字通りの「山場」である、マイケルが彼の仲間たちとアフリカの高地を「順化ハイク」しながらキリマンジャロの麓にたどり着き、クリスマス・イブの深夜を期して頂上にアタックするシーンです。心身ともに極限状態に陥ったマイケルは、ガイドのオーガストに助けられ、遂に登頂を果たします。

さて皆さんは、安定した実入りのいい仕事を投げ打ってまで、自分が本当にやりたい翻訳をしたいと思いませんか？ もしそうなら、ぜひ、このプロジェクトに参加してください。私は、この物語に登場するガイドたちのように、皆さんをサポートしたいと思います。